

新ガッツだ おまかせくん!

小学校編

作 ロナウジーニョ太郎

No.42



※5月の連休はゴールデンウィーク、9月の連休をシルバーウィークといいます。

国東が生んだ世界の哲人
三浦梅園
その足跡と思想(その2)

少年梅園の学問への道

豊後聖人と讃えられる梅園は、少年時代の学問の道あつてのものでした。10歳の頃から、家の書物を片端から読み、わからない字を書きたため、山越えの一里(約4km)の道を歩き、西白寺(安岐町朝来弁分)にあつた字彙(漢字辞典)で調べたのでした。16歳の時には、本格的な勉強のため、往復30kmの道「黒岩往還」を通り、杵築の綾部網齋のもとに入門しました。往復約8時間の道のりを、少年梅園は日帰りです。綾部網齋は杵築藩きつての学者で、後に日本の天文学を革新することになる天文学者麻田剛立の父です。やがて梅園の優秀さを伝え聞いた中津の学者、藤田敬所から招かれて学ぶこととなります。藤田敬所には跡継ぎがなく、梅園を養子にしたいと思つてのことだつたようですが、梅園も一人息子であり、一カ月ほどで中津を離れ故郷に帰ることになりました。しかし、梅園は生涯、師の藤田敬所を敬つたのです。

問い合わせ 三浦梅園資料館
☎0978-64-6311



「黒岩往還」：当時、富永杵築を結んでいた街道で、記録によると、富永から弁分(べんぶん)→山浦橋上(はじかみ)→管尾(すごう)→五田(ごた)→宮司(みやじ)→清水寺口(せいすいじぐち)→杵築をむすんでいました。



吉弘楽は、南北朝時代に大友家の分家、吉弘正賢が始めたことされ、戦勝と五穀豊穡、虫よけを祈願したと伝えられています。

楽庭八幡社で毎年7月第四日曜日に午前、午後の2回楽打ちがありますが、今年(7月26日)は雨天のため午後のみ行われました。

また吉弘楽は、吉広地区の方々や吉弘楽文化財愛護少年団に加え、市内の企業に勤める方が鉦を打ち、大分県職員が笛を吹いて参加するなど、地域をはじめ、一般の方々にも支えられ後世に継承されています。

国指定重要無形民俗文化財
吉弘楽(武蔵町吉広)